

「医薬分業による薬剤給付の合理性に関する調査研究事業」報告書サマリー

1. 研究の概要

(1) 研究の目的

前年度事業では、医薬分業がある程度進展した現在において、保険調剤薬局がどのような認識で利用されているか、その実情を探る目的で、患者意識調査並びに保険調剤薬局についての実態調査を通じ、医薬分業に対する評価・満足度について把握するとともに、医療機関等、各方面へのヒアリング調査を実施し、医薬分業に対する認識についても確認した。その結果、本来のかかりつけ薬局機能の趣旨について患者に十分浸透していないことなどが分かった。

これらの実態把握を踏まえて今年度事業では、医薬分業の一つの側面として、薬剤使用の実態について院内投薬(非分業)と院外投薬(分業)との比較を行った。また、薬剤使用における質の向上と効率化に資するべく、主要な疾病に対して現在行われている薬剤処方について保険者独自のデータベースを作成し、これを分析することも試みた。しかし、今年度は検討期間との関係もあり、これらについて概要を把握するとともに今後の分析手法の確立に調査の主眼を置いた。

(2) 研究の内容

上記、研究目的を達成させるために以下の研究項目で分析・解析を行った。

レセプトデータの収集

レセプトのデータベース化

医科レセプトと調剤レセプトのデータ突合

院内調剤レセプトと院外レセプトの比較による患者背景の相違の把握

総点数、総薬剤点数、薬剤費比率、後発医薬品割合の把握

疾病別薬剤使用状況

ア．高血圧

イ．高脂血症

ウ．骨粗鬆症

エ．糖尿病

(3) 研究調査対象レセプト

老人レセプト

全国総合健康保険組合協議会加盟のうち50健康保険組合における老人保健の平成14年7月～12月診療分全レセプト。

一般レセプト

首都圏を中心とする総合健康保険組合に属している被保険者の平成14年7月～12月診療分全レセプト。ただし解析にはこのうちの10月及び11月診療分を用いた。

2. 研究結果

(1) 調査対象レセプト

対象期間	老人レセプト	一般レセプト
	平成14年7月～12月	平成14年7月～12月
両方レセ ^(*1)	407件	860件
院内レセ	5,684件	147,516件
院外レセ	4,992件	124,381件
調剤レセ	4,125件	149,190件
合計	15,208件	421,947件

OCRによる読み取りに適さないレセプトがあったため分析可能な調査対象レセプト件数は老人レセプトが15,208件、一般レセプトが421,947件である。

調査対象レセプトにおける院外処方箋発行率(院外レセ/(院内レセ+院外レセ))は老人レセプトが46.8%、一般レセプトが45.7%で、いずれも平成14年社会医療調査^(*2)の院外処方率の46.0%とほぼ同じ率である。

なお、一般レセプトについてはこの中から10月及び11月診療分を解析対象とした。その件数は以下のとおりであった。

	一般レセプト
両方レセ	304件
院内レセ	48,430件
院外レセ	43,169件
調剤レセ	49,860件
合計	141,763件

(2) 分析結果

総点数について(レセプト1件当たりの総点数)

レセプト1件当たりの総点数は老人レセプト(院内1990.7、院外2737.2)、一般レセプト(院内1107.1、院外1375.3)いずれも院外処方が院内処方 に比して高く、診療報酬上の仕組みを反映した結果となった。

総薬剤点数について(レセプト1件当たりの総薬剤点数：投薬のみ)

レセプト1件当たりの総薬剤点数は老人レセプト(院内805.2、院外870.5)、一般レセプト(院内407.6、院外443.2)それぞれ院外の方が高く、医薬分業の実施により薬剤費が減るのではないかとこの予測とは一致しない結果となった。

薬剤費比率について

レセプト1件当たりの投薬薬剤点数を総点数で割った薬剤費比率は、老人レセプト(院内40.4%、院外32.3%)、一般レセプト(院内36.8%、院外32.2%)いずれも院内処方の方が高い結果となった。

後発医薬品の割合

診療報酬上の後発医薬品の点数割合を院内と院外で比較すると、老人レセプト(院内7.5%、院外5.0%)、一般レセプト(院内6.5%、院外4.4%)いずれも院内処方が後発医薬品を使用する割合が高い結果となっており、院外の方が薬剤費が高い理由の一つと考えられる。

疾病別薬剤使用状況

生活習慣病の観点からレセプト上記載のある傷病名のうち高血圧、高脂血症、骨粗鬆症、糖尿病の4疾病に注目して、それぞれの使用薬剤を調査した。

老人レセプトでは高血圧と骨粗鬆症の罹患率がいずれも高くそれぞれ27.5%及び10.6%であった。

一方、一般レセプトでは高血圧と高脂血症が高く前者が5.5%、高脂血症3.6%であった。

疾病別については以下の通りである。

ア．高血圧

老人レセプト、一般レセプトともに他の疾病と比較して使用薬剤の種

類が圧倒的に多く、いずれも 300 品目を超えており、対象患者数も最も多いのが特徴である。レセプト頻度順では、いずれもノルバスク錠 5mg が最も多く、老人レセプトの場合で対象疾患を持つ全患者の 2.2%、一般レセプトの場合で 4.6%に処方されている。

また、いずれの場合も同一成分である(ベシル酸アムロジピン)ノルバスク錠、アムロジン錠の占める割合が高く、老人レセプトでは適応症を持つ患者の 3.3%、一般レセプトでは同じく 7.4%に使用されていた。

イ．高脂血症

薬剤点数順でみると老人レセプト、一般レセプトともに薬剤上位 5 品目の占める割合が高く、前者で 18.9%、後者で 26.3%である。また、適応症を持つ薬剤の合計点数に対しても前者で 94.1%、後者でも 77.7%でいずれも調査対象 4 疾病ではもっとも高い。いずれも上位 4 品目は HMG - CoA 還元酵素阻害剤で、調査対象期間には同製剤の後発医薬品が上市されていなかった為に後発医薬品比率は調査対象 4 疾病ではもっとも低い結果となった。

一方、レセプト頻度順では老人レセプト、一般レセプトいずれもメバロチン錠 10 が最も多く、前者の場合で適応症を持つ全患者の 2.0%、後者の場合で同 3.4%で使用されており、前者の場合で適応症を持つ患者の 13 人に 1 人、後者の場合では 9 人に 1 人に HMG - CoA 還元酵素阻害剤が使用されている。

ウ．骨粗鬆症

老人レセプト、一般レセプトいずれの場合も使用薬剤数は 70 を超えている。また、調査対象 4 疾病の中では後発医薬品の割合がもっとも多く、老人レセで 8.4%、一般レセで 7.5%である。

一方、レセプト頻度順では、いずれもエルシトニン注がもっとも多く処方されており、老人レセの場合で適応症を持つ全患者の 4.4%に、一般レセの場合で 3.1%に使用されていた。

エ．糖尿病

適応症を持つ薬剤上位 5 品目の占める割合は総薬剤点数に対しては、老人レセプトで 5.0%、一般レセプトで 8.4%、適応症を持つ薬剤の合計点数に対しては、前者で 59.7%、後者で 60.0%である。また、後発医薬品の割合はいずれも 1.7%で低い。

一方、レセプト頻度順ではいずれも薬剤点数順では入っていないオイ

グルコン錠がもっとも多く、老人レセの場合で適応症を持つ全患者の1.1%、一般レセの場合でも1.9%に使用されていた。

オ．疾病別後発医薬品比率

骨粗鬆症の後発医薬品比率が老人レセプトで8.4%、一般レセプトで7.5%と高い一方、その他の疾病ではいずれも5%以下であった。

3．今後の研究課題

今回の試行を踏まえて今後の調査研究の進め方として次の2点が考えられる。第一に、薬剤の使用実態について継続的に分析を行うことである。調査対象レセプト及び調査時期を毎年一定にすることによって、その年の特徴とともに、年次変化が把握できる。対象レセプトの範囲を拡大して全国の状況が反映できる体制に持っていくことも必要であろう。また、OCRによる読み取りという技術的な理由で、対象レセプトの選択に偏りが生じることは避けなければならない。一層の技術的な工夫が期待される。調査時期については、一般レセプトに対しては、季節的変動が少ないと思われる10月と11月の2ヶ月を選んだが、特に不都合は生じなかった。分析内容についてはさらに検討する必要がある。

調査研究の進め方の第二は、薬剤使用に関連する施策や診療報酬上の点数設定がどのような効果をもたらしたかを検証することである。これにより、その施策を続けるべきか又は一層強化すべきか、あるいは廃止も含め改善すべきかについて示唆が得られるであろう。

(* 1) 同月内に院内で投薬し、処方箋も発行しているレセプト

(* 2) 平成14年社会医療診療行為別調査の概況

厚生労働省大臣官房統計情報部社会統計課社会医療統計第一係
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/sinryo/tyosa02/>